

岩手県の夏秋キュウリの現状と

栽培上の問題点

岩手県江刺農業改良普及所

松 岡 静 彦

はじめに

岩手県の夏秋キュウリは、昭和35年頃前沢町で「トキワC系」で栽培されたのが始まりで、「岩手キュウリ」として、京浜市場に出荷されたのは、昭和40年頃、北上市更木町で栽培されたものが出荷されたのが始まりであった。現在では、京浜市場向けの野菜の中で、岩手県を代表する品目となり、京浜市場向けに供されている夏秋キュウリの栽培面積は300余haと推定される。

接木方法は、「よびつぎ」が一般的である。最近「さしつぎ」が行われて来ている。

育苗日数は、30～35日位である。

(3) 本圃準備

圃場は、耕土深く、排水良好で、灌水できる場所を選ぶようにしている。生産力の高い圃場にするために、有機物の多投に努め、土づくりに努力している。

(4) 施肥

一般に多肥の傾向にある。有機質肥料を中心に、施肥設計を組んでいる産地が多いが、化学肥料は、元肥に、「CDU燐加安555号」を使用し、追肥には、「燐硝安加里S646号」が中心に使用されている。

(5) 定植

植穴に、エチルチオメトン粒剤を施用しアブラムシ防除に努め、また、4月下旬播種の作型ではポリマルチを利用して、地温を確保し活着促進に努めている。

(6) 整枝、摘芯、摘葉、摘果

主枝は、4～5節での側枝および雌花を早期摘除し、下位節間の短い場合、7節位で摘除している。また、アーチ頂上の30cm手前まで伸びた時点でピンチする。

側枝は、本葉2枚残しピンチ、8～10節以下は2～3果収穫後摘除し、8月下旬で摘芯をやめ放任する。

摘葉は、枯れ葉、病葉を随時行い、老化葉は、定植後

表1 岩手県の夏秋キュウリ指定産地一覧表

指定産地名	指定年月日	区 域
岩手中央	45.10.13	盛岡市、紫波町、矢巾町、都南村、滝沢村
花 北	45.10.13	花巻市、北上市、石鳥谷町、東和町、大迫町
胆 江	47.6.28	江刺市、水沢市、前沢町、胆沢町、金ヶ崎町、衣川村
一 関	48.3.20	一関市、花泉町、平泉町
八 幡 平	48.6.21	葛巻町、西根町、松尾村、岩手町
二 戸	48.6.21	二戸市、一戸町、浄法寺町、安代町
盛岡北部	50.6.19	雫石町、玉山村
三 陸	50.12.19	大船渡市、陸前高田市、住田町、三陸町
陸 中	51.12.15	大東町、藤沢町、千厩町、東山町、室根村、川崎村
和 賀	51.12.15	和賀町、江釣子村、湯田町、沢内村
富 古	52.12.15	富古市、田老町、山田町、新里村、川井村

(岩手県畑作園芸課資料)

県内には、表1の通り11地域に指定産地として指定されており、各産地とも、良品質で、消費者に安心して食べてもらえるキュウリ作りに一生懸命である。以下、一般的な栽培について、記述する。

1. 栽培の実際

(1) 作型と品種

従来、岩手県の夏秋キュウリは、4月下旬播種、5月下旬定植の作型が中心であった。

最近、収穫期間の延長と、良品質のキュウリ生産のためと、そして、栽培者の作付規模拡大を計ることから、さらに作型が分化していく傾向にある。

(2) 育 苗

床土が育苗のポイントとなるが、熟成床土使用を原則としているが、速成床土を利用している栽培者も多い。

図1 岩手県内の夏秋キュウリの作型 (野菜園芸事業推進方針より)

作 型	品種	地 域
4日 5 6 7 8 9 10 ○×●□	銀星	県南地域
○×●□	北星	県中、県南地域
○●□	同上	県北、県中、県南地域
○●□	同上	県中、県南地域
○×●□	同上	三陸沿岸地域
○●□	同上	三陸沿岸地域

凡例 ○播種×接木●定植□マルチ△ハウス○トンネル□収穫

35~40日頃より行い、1回1株当り2~3葉を限度とし、1週間に1回くらいの割合で行う。9月中旬以後は、完全な枯葉、病葉だけを行っている。

草勢維持と安値および市場連休時の出荷調整を兼ねて、曲果、変形果の摘果を行っている。

(7) 病虫害防除

① 黒星病——種子消毒、資材消毒を行うと同時に、トリアジン水和剤、トップジンM、ベンレート水和剤等を茎葉散布。

表3 栽植距離

	畦 巾	条 間	株 間	10a当り株数
接木苗				
1本仕立	220cm	80cm	70cm	952本
2本仕立	220	80	90	740
自根苗				
1本仕立	220	80	60	1,111
2本仕立	220	80	75	889

② 立枯性疫病——冠水しやすい所は、高畦とし、生育中、有機銅水和剤、パンソイル乳剤等の土壌灌注。

③ ペト病、炭そ病——資材消毒を行い同時にジネブ水和剤、ビスダイセン水和剤、ダコニールを茎葉散布。

④ うどんこ病——モレスタン水和剤、ミルカーブ液剤等の茎葉散布。

⑤ 斑点細菌病——種子消毒、資材消毒の徹底と同時に、有機銅水和剤、銅水和剤等の茎葉散布。

⑥ アブラムシ——エチルチオメトン粒剤等の土壌施用、マラソン乳剤、DDVP乳剤等の茎葉散布。

(6) 収 穫

80~120gのキュウリを目標に収穫しているが、中心

表4 キュウリの標準出荷規格

形量区分	1本重量	1本の長さ	選別調整	容器	量目	荷造り方法
L	(g) 120~150 (1箱80本中心)	(cm) 22~24	同一品種で品質形状を揃える。いは落ちに注意する。	ダンボール	10kg	ハンドボクサー止め(底ぶた4ヶ所上ぶた2ヶ所)
※ M	90~120 (1箱108本中心)	20~22				
S	80~90 (1箱126本中心)	18~20				
SS	65~80 (1箱140本中心)	16~18				

表2 施肥設計例 (胆江地区栽培指針より)

肥料名	区分	一般ほ場			肥沃ほ場		
		元 肥		追肥	元 肥		追肥
		深層施肥	全面施肥		深層施肥	全面施肥	
堆 肥		3,000	3,000		3,000	3,000	
乾燥けいふん		100	100		100	100	
苦土入重焼燐		40	40		40	40	
CDU 燐加安555		60	60		20	40	
アズミン石灰		100	100		50	50	
燐硝安加里 S646		—	—	180	—	—	180

成分N46.8 P52.4 K46.8 N37.8 P44.2 K37.8

規格は、M(90~120g)級で、AM規格のものをより多く出荷することが栽培者の目標となる。

収穫は、果実温が低い朝夕の1日2回としているが、低温期に入る9月下旬以降は、1日1回の収穫となる。

2. 今後の方向

(1) 収穫期間の延長と栽培規模の拡大

7月、8月が、岩手キュウリの主流であるが、夏場の収穫期の管理作業および収穫作業が、意外にきつくなるため、栽培規模が拡大されず、産地として、十分な機能を果たせないような規模に縮小されていく傾向にある。

作型の組み合わせにより、個々の栽培規模拡大を計り、同時に、収穫期間の延長を考えてゆく必要がある。

(2) 土作りの徹底

生産の基盤は「土」にある。品質を高め、生産を上げていくためには、小手先だけの技術だけでは、どうにもならない状態になって来ている。

「土」を豊かにすることが、経営を豊かにすることを認識、土作りを押し進める必要がある。

おわりに

黄色のダンボールに入った「岩手キュウリ」が、今後更に消費者に好まれ、岩手キュウリを消費してもらうためには、良品質で、消費者が要求するだけの量を、コンスタントに出荷して行く必要がある。そのために、生産者と関係者との信頼をより一層強くし、目標に向け、微力ながら、私自身も努力して行く覚悟です。